
教育総合センター

だより

NO. 114

平成 21. 12. 1

あれから30年経ちました

— 授業の職人を目指して —

尼崎市立南武庫之荘中学校
校長 倉橋 忠



「お世話になりました。会社を辞めさせてください。」と辞表を書いたのが昨日のように思い出される。28歳の秋だった。もう30年以上が経つ。

自動車工業界の末端で働く営業マンだった私に転機が訪れた。それは産業ロボットとの出会いであった。当時の私は、勤めていた会社が新規設立する産業ロボット販売部門の責任者を任されることになっていた。某大手メーカーの経営戦略の一環だった。社命を受けた私は、産業ロボットが稼働する工場を見学した。私は営業意欲を失った。すでに当時のロボットは、力持ちで、かつ繊細な仕事が出来るとてつもない優秀な「労働力」だった。20年のベテラン技術者の30人分の作業能力を保有する。1台が1200万円。労働者3人分の年間所得だ。「こんなモン売れるか。失業者を何人生み出すんや」と辞職を決意した。勤務する会社を与えるダメージも考えずに…。

「アホ。何回、言うたらわかるんや。聞くんやない。盗め。」と、「なんで？」と聞くたびに、何度も父親に叱られた幼い頃の私。根っからの職人氣質の父親は、職人の教育方法で私を育ててくれた。母方の祖父は、それ以上の職人肌だった。二人の職人から「仕込まれた」私は、「質問」できない人間に育っている。父は大阪城公園や中之島公園などに庭師として爪痕を残し、祖父は近畿一円の神社仏閣に左官作品を残して他界した。けれども、「おまえは後を継いだらアカン」と職人氣質だけを私に伝え、「一番弟子」の私に職業を継ぐことを許さなかった。

父が病に倒れ家業は廃業。18歳の時から履き慣れた地下足袋を脱いだのは27歳の時である。その後は流転。様々な仕事に就いた。たどり着いたのが「教職」だった。35歳になっていた。

「俺は、授業の職人になる」と決意するのには、時間はかからなかった。初任者のときに会った校内暴力の凄まじさがそうさせた。何人もの先輩教師が殴られた。多くの子どもたちはそれ以上に傷ついた。彼らは今年40歳になった。大乱闘を制した当時の私が感じたこと。「低学力が全てを生み出している」。「わかる授業」をする先生の授業は荒れなかった。授業研究は命がけの作業だ。己の人生の大半を賭けるだけの価値がある仕事だと思ったとき、生来の転職癖は止まった。

「授業は人類の文化を後世に伝える営み」である。その文化とは何か。個人が生きるために学ぶような「ちっぽけ」なものではないはずである。測りきれない質量をもったもの、それが文化の重みに思えてならない。

「職人」として見たとき、私がしてきたことは、父親や祖父の「仕事」の足元にも及ばない。職人の世界の教育方法は、学校が成立する前から、高度な技術文化・職人文化を伝えることに成功してきた。一方、今日の教育システムは、人類が生き延びる「すべ」を伝えきれるのか。未だ私の授業論は、文化を伝えきれる授業方法にたどり着けていない。私には何が出来るのか。あれから30年以上が経った。けれども、日暮れて道なお遠し。